授業実践のひろば

対話を通して子どもたちと考える

― 家庭科って何だろう？ ―

岡　部　雅　子
お茶の水女子大学附属小学校

日本家庭科教育学会誌，63(3)：145－150，2020

1．はじめに

お茶の水女子大学附属小学校では，平成27年度から４年間文部科学省研究開発指定を受けて新教科「てつがく」の研究に取り組んできた。新教科「てつがく」とは，身近な生活の中から当たり前と思われるさまざまなことがらや価値に問いを求め，子どもと教師とで「対話」「記述」などの言語活動を通して互いの考えをじっくりと聴き合い，問い直し考え続ける学びである。

堀内（2020）は学習方法としての「対話」の重要性を指摘し，「他者を受容し，互いに尊重しあえる関係を構築していくための対話の力を，家庭科の授業を通して育みたいものである」と述べている。筆者は，「対話することはすなわち考えること」（梶谷，2018）との捉えから授業実践を積み重ね，家庭科の学習の中で「考える」ことの位置づけや，家庭科の授業に対話を取り入れたことで得られる成果と課題を明らかにしてきた。（お茶の水女子大学附属小学校，2019）

研究の最終年度にあたる平成30年度の小学６年生は，３年生の時から新教科「てつがく」や，各教科において対話の経験を重ねてきており，対話する姿勢が身についている。こうした背景から，２年間家庭科を学んだ卒業間近の小学校６年生と，「家庭科とは何か」を問う対話の授業を実践したので報告する。

（受付日　2020年4月25日／受理日　2020年7月31日）
Masako OKABE
〒112-8610　東京都文京区大塚2-1-1

対話の前には「各々にとっての家庭科」を語れるための，いわば共通の土俵を作る時間が必要だと考えた。そこで，卒業を控え，在校生に何を残していけるだろうか，と考え始めた６年生の意識を汲み取って，家庭科をこれから学ぶ４年生に向けてグループごとにパンフレットを作り，プレゼンテーションを行う活動を設定した。そして，パンフレットを作った後で，「家庭科とは何か」について対話を行うことにした。

2．授業実践の実際―対話に向けてー

(1) 学習指導計画

授業は，平成31年２月に国立大学附属小学校６年生３学級で行った。そのうちＡ学級28名での実践について，報告する。

単元名は「学んだことを生かして－家庭科パンフレットを作ろう－」，学習指導計画は表１の通りとした。

表１　学習指導計画（全９時間）

第一次	学んだことを振り返りながら，これから家庭科を学ぶ４年生のために家庭科パンフレットを作る。（６時間）
第二次	パンフレットを発表し合い，「家庭科とは何か」について話し合う。（２時間…対話は２／２時間目に行った）
第三次	４年生の教室へ行き，グループごとにプレゼンテーションを行う。（学年活動として１時間計画していたが，インフルエンザの流行で中止となった。）

(2) 家庭科エピソード集で経験を想起し共有する

家庭科を学ぶ４年生に向けてのパンフレット作りに先立ち，まず，２年間の学習の振り返りを共有することから始めた。パンフレット作りの前に

この活動を取り入れたのは，パンフレットが単に学習内容の羅列になることを避けたかったからである。４年生に向けてプレゼンテーションをする際に，子ども目線での学習経験を自分の言葉で伝えてほしい，という授業者の意図があった。

単元の冒頭に「家庭科エピソード集」と書いた模造紙をホワイトボードに貼り，家庭科の学習を通して①できるようになったこと・気にするようになったこと②うまくいったこと③失敗したこと④心がけるとよいことについて，付箋に書き，貼るように指示した。(写真１・２)

子どもたちは，５年生時からのノートや学習カード，課題として出していたホームプロジェクト(家庭実践の記録）のプリントを持ち寄り，さまざまなことを付箋に書き出していった。５年生の初めに行った調理実習の失敗談を書く子もおり，よく覚えているものだと感心させられた。

①～④の視点を分かりやすく示すために付箋は色分けして用いた。自分が書きたいことは，何色の付箋に書けばいいのか悩んだり，同じ失敗をした友達と思いを共有したりしながら，子どもたちは賑やかに活動していた。

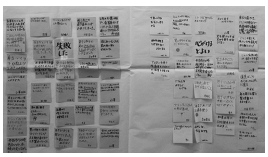

写真１写真２　家庭科エピソード集

表２　家庭科エピソード集に書かれた内容（抜粋）

①できるようになったこと・気にするようになったこと	・食べ物の栄養を気にするようになった。 ・小松菜をゆでるときに茎と葉を同じやわらかさにすること。 ・ミシンでまっすぐにぬえるようになった。 ・生活時間を見直すことができたので，整った生活を送り，十分な睡眠を取ることができた。
②うまくいったこと	・米がもっちもっちに炊けた。 ・ボタンを固くしっかりとつけることができた。 ・ミシンのいろんなぬいかたを学び，ミシン名人になった。
③失敗したこと	・白玉団子を大きく作りすぎて，中心が粉っぽくなってしまった。 ・今でも玉どめがエノキダケになる。(筆者注：玉どめが布から離れてできてしまうということ)
④心がけるとよいこと	・包丁で切るときはねこの手で。 ・ごはんはやさしくとぐこと。 ・油よごれにはお湯をつかう。 ・買い物のおともにエコバッグを。

エピソード集に書かれた内容から，一部抜粋してまとめたものが表２である。

(3) 家庭科パンフレットを作る

次に，グループごとにパンフレットに何を盛り込むのかを考えて，制作に取りかかった。

パンフレットに用いた材料は，四つ切り画用紙二枚である。裏側で貼り合わせて，両端を内側に折り，扉のように開く形にする。表紙（写真３）を開くと，学習した内容についての頁になり（写真４），さらに開くと学習内容の続きと学習を生かして家庭で実践した内容の紹介（写真５），になるという構成とした。

パンフレットを閉じた際の裏表紙は，スペースを開けておくようにさせた。対話をした後で，ひとりひとりが問いに対する答えを書くためである。

写真３　表紙

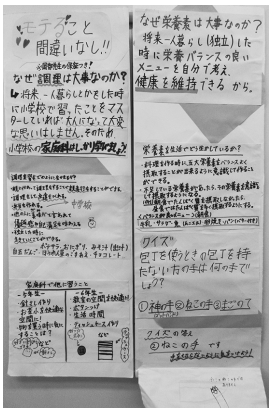

写真４　学習したこと

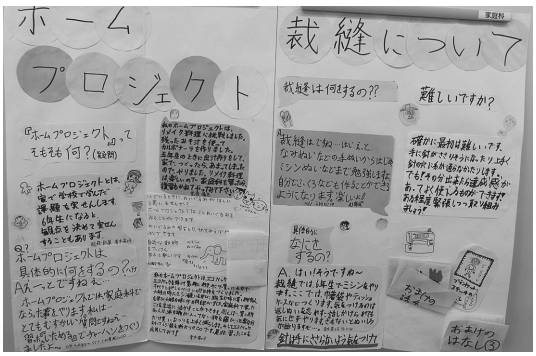

写真５　学習内容と家庭実践の紹介

４年生に伝えたいパンフレットの内容は表３の通りである。取り上げる内容は自由としたところ，表３から分かるように，調理実習を取り上げたグループが多かった。また，筆者は，家庭科では学習を生活に生かすことを大切にしたい，ということを強く伝えてきた。家庭での実践例は，これまで各自が行ってきたものの中から，自分でお気に入りの実践を選び，かつグループ内で内容の偏りがないように配慮させた。

子どもたちには，４年生の印象に残るような伝え方をしよう，と助言した。子どもたちは，色合いを美しく仕上げようとしたり，クイズを取り入れたり，実物を貼ったりと４年生が興味を持てるように工夫をしていた。また，写真５に見られるように，Ｑ＆Ａ方式で内容を紹介したり，LINE（無料通信アプリ）の画面を模した吹き出しを用いたり等子どもならではの表現方法も見られた。

表３　パンフレットの記述内容

グループ	取り上げた学習内容	紹介した家庭での実践
1	ゆでる・炊飯・一食分の調理・まとめのかるた作り	弁当作りを夕食にアレンジ・整理整頓で快適空間を・ブックカバー作り
2	食品表示・ゆでる・炊飯・皮むき・五大栄養素	白玉フルーツポンチ作り・時間をうまく使って充実した夏休みを・中華春雨サラダ作り・炊飯と水の量の関係
3	ゆでる（すりきり，ネコの手，時間差調理）・お弁当作り	一食分の朝食作り・勉強机を整理する・自分の理想のかばんを作る・実習で作った炒め物に再チャレンジ
4	弁当作り・五大栄養素・炊飯の火加減と水加減・買い物	身の回りの整理整頓・ミシンを使って作品作り・一食分の食事作り・おかずに合わせてごはんを炊く
5	調理実習を具体的に説明すると・裁縫とは・ティッシュケース作り・きんちゃく袋作り	リメイク料理みそしるからカルボナーラ・ぞうのぬいぐるみ作り・エコバッグ作りで買い物から調理まで・チャーハン作り
6	五大栄養素のキャラクター・栄養素クイズ・裁縫の持ち物やコツ	メガネケース作り・台所をピカピカに，エコなそうじ・生活時間の振り返り・おかずと合う炊飯
7	生活時間・生活空間を快適に	カイロカバーを作る・救急箱の整理・体育着を入れるきんちゃく袋作り・見た目〇栄養〇な弁当作り（筆者注：見た目も栄養バランスもよい弁当作りとの意味）

３．対話の実際と考察

（1）問いを決める

パンフレットを学級内でグループごとに発表した後，対話の問いを決めた。問いの問い方は，対話の成否を決める大変重要な要素で，対話には「この問いで話し合いたい」という主体的な思いが欠かせない。授業者の意図と子どもたちの話し合いたい問いが必ずしも一致するわけではないので，授業者が考えてきた問いを３つ提示し，その中から，子どもたちに選ばせた。「家庭科を学ぶってどういうこと？」「家庭科で絶対に学ぶべきことって何だろう？」「家庭科って何だろう？」これらの中から子どもたちが選んだ問いは「家庭科って何だろう？」であった。

（2）対話の形

対話をするときには人数や机，椅子の配置等に配慮する必要がある。低学年では，35人程度の学級でもひとつの円になって話し合うことは可能であるが，高学年になってくるとそれではなかなか意見が出ないことがある。本学級の子どもたちは７～８人程度の小グループで話し合うことを好んだ。やはり対話の際には聞き役だけでなく自らが話したい，という思いがあるのだと思う。一方，小グループにすると，グループ内での対話は活発になるが，学級全体での話題の共有が難しい。

そこで今回は，いわゆる鳥かご方式（子どもたちはこの方式をダブルサークルと呼んでいた）で行った。学級を半分に分け，前半話し合うグループと後半話し合うグループを設ける。前半話し合うグループは，椅子を丸いサークル形にし，後半

写真６　ダブルサークルの形で対話をする

の子どもたちはそのサークルを取り囲むように机と椅子とを配置し，聞き役にまわる。聞き役の子どもたちは発言してはならず，メモはとってもよいこととする。前半が終わったら後半の子どもたちと役割を交代する。（写真６）

対話の司会は子どもたちで行い，教師も随時対話に加わるが，自分の意見を言うことは控え，相づちを打つなど受容的に聞く姿勢と，キーワードを意識させるための繰り返しや問い返しを意識するようにした。

（3）前半の対話

前半の対話を始める。しばらく沈黙が続いたので，司会の子が問い方を変えて対話のきっかけを作ろうとした。（対話の記録(1)）問いに対して意見が出ない時には，問い方を少し変えてその反対を問うようにしたり（～でなかったとしたら？）例を出すよう促したりする。これは，司会の子どもがこれまでの経験で身につけていた。

対話の記録（1）

司会Ａ	家庭科がもしなかったら困ることは？
B	ぼくは，家庭科がなかったら困ることは，（中略）生きていくことが出来ないから家庭科は生きるために使うと思う。
C	（前略）ぼくもそれは賛成で，（中略）やっぱり家庭科っていうのは必要で，僕にとっては他の教科と違う意味で，将来ひとり暮らしとかするときに，暮らしに役立つものだと思う。
D	私もＣくんとほとんど同じなんですけど，（中略）将来自分がひとり暮らしするときとかって言っているけど，今も子どもとして必要だと思う。

これらの発言を受けて，Ｅ児から問いが出された。（対話の記録（2））

対話の記録（2）

E	（今，発言した）３人の方々に質問なんですけど，将来必要になる，今も必要になるって言ってるけど，今でもかなりAIの技術が発達していて，AIの力だけで料理も全部作ってもらえるし，換気をしたり部屋もずっと清潔に保っておけることも可能，だけどその中でも個人の力が必要になるというのはどんな風に活用するっていうか，なぜそこまでも自分の力を使うのか。

授業者はこの問いを「家庭科って何だろう」について考える上で絶好の問いと捉えたので，司会の子どもにもう一度言い直すように働きかけた。（対話の記録（3））

対話の記録（3）

授業者	いい質問だから考えよう。Ａちゃんもう一回言って。
司会Ａ	AIとかがいろいろ料理とかもできるけど，そこまでなぜ自分の力を使うのか

確かに，授業者は家庭科の授業において，生活におけるさまざまなことを人間の手によって行うことを前提としてきた。しかし，改めて考えてみると，ご飯を炊くのは炊飯器が当たり前であるし，部屋の環境を察知して人間が快適なようにコントロールしてくれるエアコンもある。こうした状況を認識した上で，「自分」が行う意味はどこにあるのか，という子どもの問いには授業者自身，目から鱗が落ちる思いがした。

質問された子どもたちは対話の記録（4）のように答えた。

対話の記録（4）

B	そもそもその機械をプログラムする人も家庭科を知らなければできないということです。人間が料理をするときとAIが料理をするときの違いは人間は心をこめて料理を作る。自分で作ったものは自分で心をこめて作っているから美味しいって感じると思うんですけど，機械が作ったものは自分で作ったのとか他の人が作ったのにくらべてあまり美味しく感じないかもしれない。
D	Ｂ君につけたしで，Ｘ君も（パンフレットの）発表の時に言ってたんですけど，自分で作ったものは２倍美味しいって。私もそれに賛成で，しかもＹさんがホームプロジェクトでアレンジ料理，みそしるがあまったからカルボナーラにしたみたいなことを言ってたんですけど，それって機械には難しくて自分の発想がないとそういう料理は作れないわけだから，機械に任せっぱなしだとみそしるならみそしるしかできなくて，カルボナーラって頼んだらカルボナーラしかできなくて食材を再利用するためには自分の発想が必要で，みそしるからカルボナーラっていう発想があったから食品が再利用できた。

Ｅ児の問いを受けてＤ児が述べたことは，人が工夫をすることに意味があるということである。対話に先立って発表したパンフレットの中に，みそ汁が残ったのでカルボナーラに作り替えたという家庭実践の紹介があった。（表３　５グループの発表）余った食材を無駄なく，しかもより美味しくリメイクしたという友達のアイディアに関心を寄せていたことが伝わる。

ここで，前半の対話の時間が終了し，後半の子どもたちと交代となった。司会も後半担当の子ど

もに替わる。

(4) 後半の対話

後半は，前半の話を受けて対話を始める。最初から活発に手が挙がった。

対話の記録（5）

司会Ｆ	先攻（筆者注：前半の話し合いを指す）の続きで話したいことがある人？
G	（前略）機械って失敗することが少ないじゃないですか。人間って失敗して学ぶことっていっぱいあるから，苦労を知らずに生きることっていうのはあまりよくないと思うので，忙しい時に機械に任せるのは仕方ないと思うんですけど，少しは自分でやることも必要だからやっぱり家庭科っていうのは学んでおくべきだと思います。
授業者	人間は失敗からしか学べないから…（つぶやき）
H	家庭科を学ぶのがいいっていうのは賛成なんですけど，機械って心がこもってないって言ってたけど，（中略）機械が作っても，人間が機械的に作ってもたいして変わんないわけだから，機械が作ってもいいんじゃないかなって思うからＧちゃんの意見には反対です。

この後，人間が食べ物を作る時と，機械が作る時の違いについての対話が続いた。ここから，話題は「食」に特化していったわけだが，子どもたちの中に，人間が命をつないでいく上で食べることは非常に大切だ，という認識が強かった。４年生に向けて作ったパンフレットの中に調理実習が多く取り上げられていたことからも，食への興味関心が高いことがうかがえた。

特に，「食には作り手と食べる側の意思疎通が非常に大切で，食を通してのコミュニケーションが食べることをより充実させ，満足感や幸せな時間が生まれる」と言ったＩ児の発言は強く印象に残った。（対話の記録（6））

対話の記録（6）

I	私もＧちゃんとＦちゃんの意見に賛成で，生きていくためには食べることがすっごい重要なので，食べることをより充実するためには，食べるものから食べる人に，食べるものを通してどう満足感や幸せを与えられるのかっていうことだと思うんです。そのためには食べ物だけじゃなくて，どういうふうに，作った人の気持ちや，どういうふうに感じてもらいたいのかっていう気持ちをコミュニケーションを通して話すことで，より食べる方としても作った側としても，より充実した食べる時間，夜ご飯とかになると思うので，機械が作るよりは満足感が得られると思います。

(5) 家庭科はいらない？

後半の対話が終了後，学級全体の子どもたちから意見を募った。現代社会では機械から受けている恩恵もあるのではないか，生活の全てを機械に委ねてしまうことには抵抗感がある，などの考えが出された。また，これから社会はますます機械化し，家庭科が必要でなくなる時代が来ると思う，という意見もあった。

ここで，時間が来て対話は終了した。まだ意見を言いたい子どもたちがいて，もっと時間がほしかった，続きをやりたいという声があがった。しかし，授業時間も限られているので，対話はこれで終わりとし，４年生に伝えに行く前に「家庭科って何だろう」という問いの答えを一文で記述し，パンフレットに貼って完成させることにした。

4．まとめ

(1) 本授業での対話における成果と課題

「家庭科って何だろう」という問いで対話を始め，途中でＥ児の問い（対話の記録（２））を中心に据えることで，ただ単にこれまでの家庭科から発想するだけではなく，現在，未来の生活を見据えた上で，家庭科を捉え直す必要があることを子どもたちから教えられた。これは，当初の授業者の予想をはるかに超えた内容であり，教師にとっても新たな学びとなり，問いが常に授業者側から発信される学習方法とは一線を画す，対話の効果を実感した。

対話のよさは，こうした問いの変化が起こることにより，話が深まったり広がったりしていく点にあるが，そのために，大切だと思ったタイミングを逃さず，もう一度繰り返して言わせたり，問い直したりすることは，ファシリテーターとしての教師の役割である。本授業では，Ｅ児の問いが，家庭科を学ぶ意義を問う上で本質を突いているということを，授業者が対話の中で捉えることができた。しかし，言葉は瞬時に消えてしまうため，タイミングを逃さず，大切な発言を捕まえることはとても難しい。

キーとなる問いを捉えるためには，対話の行方

をあらかじめ想定しておくことが必要となる。子どもたちの対話が，実感の伴わないただの言葉の応酬にならないよう，話し合う上での共通の土台を作ることも必要である。

(2) 家庭科って何だろう

対話を終えた後で子どもたちが書いた「家庭科って何だろう」という問いの答えをキーワードで分析し，表４にまとめた。キーワードが重複しているものがあるため，人数計が29となっている。

表４「家庭科って何だろう？」の答え（児童数28）

キーワード	人数
生きるために必要	14
楽しく，充実，心のこもった等（感情を表す語）	8
将来・未来の暮らし	5
工夫	2

対話の中で子どもたちは，自分の生活経験と家庭科とをつなげて考え，工夫をすることや，材料を無駄なくしかも付加価値をつけて作り替えることに価値を見出していた。また，自分の手で行うことは自らの成長につながり，人の生活をより充実したものにすること，機械化が進む未来においては人間の存在価値ともなるとも指摘していた。「家庭科って何だろう」という問いの答えにそれが表れている。（表５）

表５　「家庭科って何だろう」の答え（抜粋）

- 自分の幸せを認識するもの
- これからの人生に役立ち，一つの日本の未来をつくり上げていくためのもの
- 人間が未来になっても唯一しつづける，人と人とをつなぐ方法
- 人と人との間に笑顔を届けることができる（もの）
- 自分で自分らしさを出し，自分で工夫し，生活を楽しくおもしろくするための教科だと思います。

一方で，機械に任せることのよさにも言及しており，時と場合によって使い分けることが必要だとの意見もあった。

本授業では，２年間子どもたちと共に家庭科を学習してきた授業者の教師としての姿勢が問われたことにもなる。機械が壊れたときのために家庭科を学ぶ，機械化が進んでいけば家庭科は必要がない，という意見には，今後さらなる課題を与えられた思いである。子どもたちが示した答えを受けとめ，これからの時代の家庭科を考え続けたい。

謝辞

本授業の実践にあたり，ご指導いただきました横浜国立大学松葉口玲子先生，お茶の水女子大学小玉亮子先生に心より感謝申し上げます。

引用文献・参照文献

堀内かおる.（2020）. 生活をデザインする家庭科教育. 京都：世界思想社.

梶谷真司.（2018）. 考えるとはどういうことか：０歳から100歳までの哲学入門. 東京：幻冬舎.

お茶の水女子大学附属小学校.（2019）. 第81回教育実際指導研究会発表要項.